

<書評>

山根実紀 著／山根実紀論文集編集委員会 編
**『オモニがうたう竹田の子守唄 在日朝鮮人女性の学びとポスト植
 民地問題』**

インパクト出版会 2017年12月

添田祥史(福岡大学)

本書は、将来を期待されながらも夭逝した山根実紀の論文集である。読者は、彼女がどのように、ひとりの日本人として、ひとりの女性として、夜間中学や識字学級に通う在日朝鮮人女性と出会い、その中で見えてきた学習者を取りまく複合的な差別や抑圧的な権力関係と向き合ってきたのかを知ることができる。6本の研究論文（修士論文含む）、6本のエッセイ（投書、活動報告、レポート含む）が収録されている。

私は、生前に数度、夜間中学関連の集会や教育系の学会で彼女にお会いしている。当時、私も在日朝鮮人女性が多く在籍する識字学級に通いながら大学院時代を過ごしていた。「識字実践の日常を解説する」という彼女と同じテーマに取り組んでいただけない、私自身の批判的思考や分析視角の弱さを反省したことを思い出す。そして、今回、彼女の活動家としての生き様をはじめて知り、その想いが一層強くなった。

彼女は言う。映画『学校』（山田洋次監督）に描かれているような熱血教師に感化されていく生徒像が「学校の原点」ならば、「原点」から問い直していく必要があると（172-173頁）。「生徒の体験から学ぶ」や「オモニから学ぶ」というスローガンを掲げつつも、実際には教師と生徒の関係性は固定化されてしまっており、教師たちの予め設定した生徒像を押し付け兼ねない状況にある。だからこそ、夜間中学関係者は、同化と排除の構造を自己内発的に問い続けなければならないという。

批判的思考の矛先は、彼女自身にも向けられている。自身の研究を省察し、「私には、聞くことも想像することもできない記憶がある」ことに無自覚となってしまうと、「民族や階級、ジェンダーといった一方の語りに回収してしまう可能性がある」とも述べている。「私たちに問われているのは、『沈黙』への想像力と、しかしそれを想像することの困難さと向き合うことではないだろうか」（190頁）と自問する。

夜間中学新時代の到来と言われる今日だからこそ、本書が放つメッセージと告発にきちんと向きあわなければならない。彼女と議論することはもう叶わない。しかし、彼女の思索と対話すること、そして、各々が行った彼女の思索との対話の結果を持ち寄り、今を生きる私たち同士が議論することは可能である。

編纂は、板垣竜太、岡真理、駒込武、中村一成が務めている。論稿ごとに大学院時代の指導教員であった駒込による短い解説が付されており、中村によるまえがき、巻末の編者による原稿と年表を併せて読むことで、彼女の問題意識に接近しやすくなる。基礎教育保障に関わるすべての人に読んでほしい一冊である。